The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国際英語への対応 : 日本人の立場から
Author(s)	大橋, 克洋
Citation	大阪外大英米研究. 1988, 16, p. 151-165
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99127
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国際英語への対応
——日本人の立場から

大橋克洋

I

Gregory Trifonovitch というアメリカ人が或る国際学会に出席したときのことである。何番目かに日本人女性が発表を行ったところで，珍しいことが起こった。発表直後二人の英語母語話者が相次いで，発表の内容に関係する質問ではなく，彼女の英語表現に関する質問をした。すると，それを受けて別の二名のやはり英語母語話者が，発表者を差し置いて，質問者と他の出席者のために，問題にされた英語表現を彼らなりの解釈であるいは言い換え，あるいは解説してみせたのである。母語話者たち四人のこれら一連の行動は会場にいた一人の韓国人を激怒させた。韓国人出席者は怒りで身を震わせるようにして立ち上がり，こぶしでテーブルを叩いてこう絶叫した。「このような態度には最早我慢がならない！　日本人発表者の発言は私達に明確かつ完全に理解できるものだったではありませんか。あなた方二人は発表の中味にまったく無関係なコメントをなさったが，無礼もはなはだしい。発表者が日本人訛りの英語で話したからというのでその発表には注意を払う価値がないと判断なさったようだ。またもうお二方は，恩着せがましくも，発表者の表現を我々のために解きほぐしてやろうとなさった。皆さん，これは国際会議ではありませんか。いいかげんに言語的優越主義を捨てて，交差文化的寛容さで国際会議本来の姿を取り戻すべきではないでしょうか。」(1)

非母語話者英語に対する偏向した態度が公けに排撃される場に居合わせたのはこれが最初であるとして，Trifonovitch は特にこの体験を書き留めているが，Trifonovitch の同情と共感がそれぞれ日本人発表者と韓国人発言者の側にある

ことは後続する文章から明らかだ。韓国人には「完全に理解できる」発表が母語話者たちに理解できなかったのはなぜか。それは彼らが，今や英語がほとんど国際語となっている現実を認めようとせず，相も変わらぬ言語・文化的支配主義に立っているからに他ならないと言う。そして方言変種や発音など純粋に言語的問題よりも，こうした文化的，心理的態度こそが，異文化間の相互理解を妨げている真の要因なのだと Trifonovitch は主張するのである。Trifonovitch がその中に上掲の体験を語った短い論文の要点は，英語が国際語としての地位を確立しつつある今日，母語話者は旧来の言語的優越主義を去らなければならず，一方非母語話者は積年の劣等感を脱却することが肝要だということだ。国際共通語としての英語，縮約的に言えば国際英語，を成り立たせるための重要な条件として，「痛み分け」，ないしは「歩み寄り」とでも呼ぶべき話し手側，聞き手側双方の努力負担がある。Trifonovitch の主張を支えているのは，非母語話者にのみ努力を負担させることが最早時代にそぐわなくなってきているという認識であり，国際英語とは，母語話者も学ばなければならない言語であるという考え方である。

さて，前置きとして以上のような話を紹介したのは，国際英語に対する日本人としての対応という問題について最近私が考えていることと Trifonovitch の主張とが一部重なるからである。私は一人の英語非母語話者として，国際英語という考え方の全世界的広がりを支持するものである。また，日本人英語教師として，それが混迷する我が国の英語教育に活路を開くものであることを期待してもいる。とは言っても，国際英語としての日本人英語をただちに英語教育に取り込めよなどというラディカルな論をなそうというのではない。あくまで国際英語という考え方を採り入れ，それを立脚点に据えて我々の英語使用と英語教育を捉え直すことの意義を認めているにすぎない。「国際英語という考え方」という迂言的な用語の裏に私の秘めるものは，我々の対英語態度の変革，より具体的に言えば，英語の脱英米化を迎え入れる姿勢である。それを歓迎するにせよしないにせよ，英語の国際語化は既に現実であり，なお進行している。そしてそれは英語外国である日本と日本人をも巻き込んでいる現実である。こ

れが私の現状認識であり，本稿は，肯定的な立場から，この動向に対して日本人として何がやれるかを具体的に述べるものである。Ⅱ章では，主として態度面での日本人のあるべき対応について若干のことを述べ，言語面，即ち国際英語としての日本人英語の可能性についての論は一応Ⅲ章に譲る。

II

私の知っている或る大学教授が，自分の英語は絶えず形成期にあり，英語習得は一生の事業であると告白したことがある。日本人の英語への係わり方を代表する態度として記憶に残っているが，先ずこのあたりに日本人の大きな問題点がありそうだ。実使用を何年続けても，なおかつ自分の英語は形成過程にあると感じ，永久に英語学習者であることを止めないのだ。それは詰まる所，「母語話者のように（話し，聞き，書き，読む）」という達成不可能な目標を前提しているからに他ならない。だが，母語話者のように英語を操る必要が本当にあるのか。英語習得が一生の事業などであってよいのか。そもそも生涯をかければ母語話者のようになれるのか。答はいずれも「否」であるが，問題はこれまで誰もこのような素朴な疑問を抱いてこなかったところにある。

我々は他から学ぶことの好きな国民である。古来日本人は一貫して自国文化をローカルな文化であると思い続けてきた。前近代には中国に，近代に入っては先ずヨーロッパに，第二次大戦後はアメリカに，と日本が絶えず強力な外国に模範をあおいできたのは，この周辺文化意識のためであったが，外国への長い甘えの歴史は，彼我の関係を師弟関係において捉える日本人のメンタリティーを育ててしまったようだ。自己を英語の生涯学習者と規定したがる日本人の傾向は，一つにはこのような心性が作用した結果に違いない。だが，時代はいつまでもそれを許すだろうか。今日最早日本文化はローカルだとばかりは言えなくなっている。我が国の科学水準は高く，電子工学，医学などの面で，世界の最先端をゆく分野がいくつもある。国際社会における受益者から貢献者へと日本の立場と役割が転換していく中で，貢献のための主たる言語媒体である英語に関し，いつまでも生徒意識を持ち続けることは貢献の質と程度に影響を

与えずにはおかない。相手に対し何か憶することがあったり，自己をより低位に位置づけねばならないような状況の下ではなかなか思い切った情報発信はできないものだ。我々はいつまでも学習者の地位に身を置くのではなく，或る段階からは非母語話者ながらも自立した英語の実使用者として立つことが必要である。その際拠り所とすべきものが私の言う国際英語的観点と姿勢である。日本人の英語使用者は疎通可能な範囲内で，母語話者のもたない日本的スタイルを持ち出す権利をもつのだと考えてはどうだろう。次章にも述べる如く，日本式英語を教育モデルとするためには，なお解決されなければならない問題がある。だが，英語使用の場にそれを持ち出すためには，使用者個人の意識の改革さえあればよいのである。英米語の語法・文法に執拗なまでにこだわり，ために自由な発話ができなくなっている日本人英語話者にとって，この「意識の改革」のもつ意味は決して小さくないはずである。

眼を英語教育に転じて国際英語への対応を考えた場合，やはりここでも大きな変化が現れてこなければならないことになる。学習者から使用者へと移行した途端に英米語の呪縛から解き放たれると考えることが非現実的である以上，たとえ，依然として英米語を教育モデルとし続けるにせよ，教育段階で既に生徒を英米語の規範力から解放しておかなければならないということもある。しかし，これと密接に係わり，しかも或る意味ではそれ以上に重要なのは英語教育における文化の扱いの上の変革である。

明治以後の日本の英語教材史をふり返ってみれば，そこにはほぼ一貫して，英米中心主義，英米の美点中心主義，白人中心主義が流れていることが見てとれる。最近になってこの伝統的体質から脱しようとする傾向が出始めてはいるが，全体としては今なおこれら三代特徴は保持されているように思われる。ここからは，英米文化を最優位に置き，自国文化も含め，他の文化を低く見る文化序列主義者は生まれても，英米文化に対する批判精神はまったく育たず，従って日本人としての意思表現のできる話し手も生まれないだろう。

国際英語的観点の導入は，英語と英米文化の切り離し，ないしは英米文化の相対化，への契機となるだろう。これまで不可分のものとして抱き合わされて

きた英語と英米を中心とする母語国文化との結びつきを突き崩すわけだ。突き崩した上で，それから先をどうするかについては二つの行き方が考えられる。一つは，単に英語国文化だけでなく，文化一般から英語を切断し，英語を教えることに集中するやり方である。無論，たとえ三行から成る短いダイアローグにもシチュエーションはなければならず，そこには文化的要素が絡んでくる以上，言語と文化を完全分離することは原理的に不可能であるが，とにかく文化をも合わせ教えようという態度は取らないのである。 Lambert の言う instrumental orientation に近い。いま一つは，英語の背景文化は英語国文化であるという固定観念から学習者を解き放った上で，やはり文化をも教えるやり方である。しかしその場合の文化は，英語国文化に限定せず，できるだけ広く国際社会を対象にするのである。これは一応 integrative orientation の範囲内の改革と言えるだろう。

周知のように， Lambert はモントリオールのフランス系住民の対英語態度を調査した結果を基に，Instrumental 対 Integrative の二分法を行い，後者の態度の方がより高い言語能力を育むとしたのであるが，北米で言えたことが普遍的に通用するわけではない。現に Shaw が，インド，シンガポール，タイの英語学生たちを対象に行った調査から，三グループとも学習動機と態度が明確に instrumental である事実を捉んだ上で，特にインド，シンガポールにおける学習・教育の成果を高く評価する立場から Lambert の見解に異論を唱えたのを始め，[2] 最近 Lambert 説への疑念や反論が相次いで出されている。[3] 要するに，高い語学能力を獲得するために必ずしも integrative な方向を取る必要はなく，二つの行き方のいずれをとるかはそれぞれの地域の社会条件と教育の目的論のあり方によって決められるべきものだ。英語が完全な外国語で，将来それを真に必要とすると思われる学習者が少数派としてとどまるような国，日本で，なおかつ英語教育が学習者全体にとって有意義であるためには integrative であったほうが良いだろうし，あくまで（少数派の）実用に備えることに目的を置くならば，文化的事項の説明に時間を割かなくてすむ instrumental の方が良いということになるだろう。

英語教育・学習の目的や姿勢は多様でありうるものであり，Instrumental vs. Integrative という一対の対立概念ですくいつくせるものでは無論ない。国際英語的観点から今一つ，言わば第三の行き方として真剣に取り上げられてよいのは，例えば，文化大革命当時の中国，戦時中の我が国でその傾向が認められた自国文化中心主義による教育である。日常風俗，日本事情の紹介から日本人の思想，自己主張まで，題材を日本文化項目に統一し，日本人の生活や思想を内容として英語を教えることにより，日本人としての自己表現能力の開発をねらうやり方である。戦前の自国中心主義とここに言う自国中心主義の重要な違いは，前者が軍国主義を背景とし，後者が国際英語的考え方を基点とするところにある。大戦時英語教育の自国主義は，それまでの英米崇拝的英語教育の裏返しであった。学ぶからには愛さねばならないし，また愛する国の言語だから学ぶという，今日まで尾を引く日本人の，学習対象言語（国民，文化）と愛の対象の同一化が既に始まっていたということだ。それまでひたすら愛し，敬仰してきた英米が敵にまわった時，英語教育界の取るべき道は，英語教育の撤廃かそれに近い形しかなかった。敵だから，嫌いな国だから研究するという発想はアメリカにあって，日本になかった。今だにない。戦前の自国中心主義的英語教育は，英語廃止論とぎりぎりのところで妥協した教育であり，英米への対抗精神から日本人の価値観を打ち出すという排外主義的性格を強く帯びていた。

国際英語への対応としての自国文化主義とそうした国粋主義とを混同してはならない。この新しい自国文化主義が国際英語的であるわけは，それが国際英語の表現対象文化は英米文化に限られないという前提を逆手に取って，かつての英米文化の位置に学習者の母国文化を据えたところにある。そしてこれを前述した第二の行き方の一変形とせず，独立した第三の行き方として取り扱うのは，第二の行き方が依然情報吸収型であるのに対し，これが日本人としての意思表現に繋がるという意味で情報発信型であるからだ。ネウストプニーは，「（日本人は）英語ができないから，コミュニケートできない」という俗説を裏返して，実は「コミュニケーションできないから，英語ができない」のだと言った。(4)

「(日本人は) コミュニケーションできない」と言った時同氏が意味したことの一つは,「日本人の会話のときの非協力性」[5] ということであった。ただ会話の輪の中にいるだけでなく,自ら話題や意見を提供することによって会話の発展に貢献するという能力の欠如である。意見にしろ,感情にしろ,情報にしろ,コミュニケートするためにはコミュニケートするための内容を持たねばならないことは自明の理である。我々が英語によりコミュニケーションを行う場が専ら外国人を相手にした場合であってみれば,英語でコミュニケートする内容をもつとは,畢竟,異文化や国際的事象を受け止め,それらに反応していくための主体的立場の確立を意味するはずだ。第三の行き方,つまり英語教育における「文化の現地化」はこれを助ける。それは,コミュニケートすることを学ぶことを通して英語を運用することを学ぶという行き方であると言ってもよい。

以上,英語の国際語化に向けての日本人としてあるべき態度面での対応につきいくつかのことを述べた。ここに述べた態度の変革は単に意識の変移としてとどまる性質のものではなく,具体的な形を取って表面に現れなければならないだろう。その形とは,例えば,発言の際語学的ミスを犯すことを恐れないずぶとさという形かもしれないし,話題提供による会話の発展への積極的寄与という形であるかもしれない。だが,国際英語概念にとってより本質的な顕現の形は,発話の中に日本人特有の発想を投影させ,その結果英語自体を変容させていくという形である。これまで既に,"What time is it *now*?" (の常用) や "How do you think?" など,日本語の形式の干渉からくる日本式英語はいくつもくり返し日本人の口から発せられてきた。それらはしかし,発するたびに発話者を恥入らせ,良心の疼きさえ覚えさせる「悪」として常に存在してきたのであり,そういった日本人臭からいかに隔たっているかがその人の英語のうまさを測る重要なめやすとされてきたのである。英語の国際語化が我々に与えたものは,「悪」を「正義」へと転じることを正当化する根拠であった。今後は英語の表現形式の内側に日本人の自己主張性を折り込んでいくことが考えられてよいだろう。

III

「文化的スタイル」と仮に名づけておこう。日本人が英語使用の場に独自の「文化的スタイル」を持ち出すことの可能性について私が考えるようになった一つの契機は，次のような短い話を読んだことであった。タイでの出来事である。アメリカ平和部隊の英会話教師が生徒の一人に或る発話を怒りを込めて言ってみろと命じた。生徒は何度かやってみたがどうしてもうまくいかない。執拗に繰り返しを迫る教師に，生徒はこういう趣旨の弁明をしたというのだ。「私の国ではこういう場面で人が怒りを表すことはない。だからこの発話を怒気を含んで行うことはタイ人には無理なのです。」(6)

アメリカ人は語学教育の名の下に，タイ人にとっては不自然，あるいはアブノーマルでしかない態度をタイ人から要求していたことになる。その要求に応えることは，タイ人であることを止めて初めて可能となるだろう。外国語教育は学習者の文化と人間性を奪えるか，という問題がここに提出されている。日本人はとり分け真剣にこの問題提起を受け止めねばならないだろう。中国人，韓国人がそれぞれ Deng Xiaoping，Kim Dae Jung のように姓から名へという自国の習慣を英語使用の場にそのまま持ち込むのに対し，日本人は戦後一貫してこれを逆転させてきた。 Yasuhiro Nakasone のように。そしてこの姓名の転倒をおかしいと言う声はつい最近に至るまで日本人の間からは上がらなかったのである。(7) このことは，日本人が主体的に英語を使うことを考えてこなかったという事実を背景としているだろう。英米人になりきることを目標とし，この目標のためにひたすら日本人らしさを包み隠そうとしたことの，これは現れである。同じことを英語教育に即して言うならば，これまでの学校英語が英米文化吸収 (Yasuhiro Nakasone) のためにあり，自国文化表現 (Nakasone Yasuhiro) のためになかったということである。Ⅰ，Ⅱ章で概説した国際英語の概念は当然 Nakasone Yasuhiro の方を要求する。疎通に支障をきたない範囲内で日本人が自己の文化的スタイルを持ち出すことを私はむしろ積極的に支持したいのである。“My name is Nakasone Yasuhiro.”と名のることにコミュニケーション上まったく不都合がないわけではない。欧米人は Yasuhiro の方

を姓だと思い込む危険性がある。しかしそれを言うならば，“My name is Yasuhiro Nakasone.”も同様である。中国人，韓国人は，Yasuhiro を姓だとみなし，Mr. Yasuhiro などと呼びかねないのだ。英米人のみを仮想交信相手としないのが国際英語概念の出発点だったはずである。

このように，日本人がその英語使用の場に持ち出して構わない，いや持ち出すべきであると私の考える「文化的スタイル」を思いつくままにいくつか例示してみよう。何事であれ，思いつきのまま行われることの説得力は弱いが，それは一つの問題提起にはなるであろう。

名前の言い方について，もう一つ指摘しておきたいことがある。所謂 first-name basis である。気軽に相手を Alice, John と first name で呼べる日本人もいるであろうが，私はこれに心理的抵抗を覚える方であり，そういう日本人が決して少なくないことを体験的に知ってもいる。相手が私のことを Mr. Ohashi ではなく，Katsuhiro と呼びたいというなら，私はそれを許す。姓ではなく名で呼ぶことによって親しさを表すのが相手の文化だというなら，それを認めよう。しかし同時にこちらが相手を Bill とよべず，Mr. Crewe で通すことも容認してもらいたいと思う。相手は私を Katsuhiro と呼び，私は相手を Mr. Crewe と呼ぶ。これも実際には不都合である。実在のスコットランド人 Crewe 氏と私の間ではいつの間にか，おたがいに相手の姓名を呼び合うということがなくなった。手紙の salutation では “Dear BC,” “Dear KO,” を使う。だが，私はそのことを上述の不都合の一つの解消策と捉えている。そのことによって二人の友情関係が阻害されたという事実がない以上，否定的に見る理由はないわけだ。もっとも，“Hello, Bob.” “Good morning, Mr. Carpenter.” “Good night, Mom.” などと発話の中にしばしば姓や名や資格語を挟む習慣のある英語話者にそれを断念させることは既に相手の譲歩を求めたことになるだろう。それを思うからこそ私も “Dear OK,” ではなく “Dear KO,” に耐えているのである。

first name と言えば，Han Suyin の自伝的小説 “A Many-Splendoured Thing” の中に，イギリス人特派員 Mark Elliott と欧亜混血児 (Eurasian) Han

Suyin が次のような対話をする箇所がある。

> 'Since we've known each other over a month, do you think we could start calling each other by our names and leave off Dr. and Mr.?'
> 'All right, I'll call you Elliott and you call me Han.'
> 'I mean, first names.'
> 'All right.'
> (Han Suyin, *A Many-Splendoured Thing*, Triad Granada, 1978, p. 50)

かくして二人はお互いをMark, Suyin と呼び合うようになる。だが, Mark Elliott の first name は Mark であっても, Han Suyin の first name が Suyin になるというのは考えてみればおかしい。Eurasian でありながら中国人として自己同定し, 中国人として生きようとしている Han Suyin は, 香港に住む他の中国人のように英語名をもつこともしなければ, ましてや Suyin Han などと自分の姓名を逆転したりなどしない人間である。

Longman Dictionary of Contemporary English (1978年) の「語法説明」('first name' の項) に, "Those whose SURNAMEs come before their names, as in Chinese, Hungarian, etc., may want to use *given name* rather than *first name*." とあるが,「英語の国際的役割」にも注意を払ったという同辞書新版 (1987年) の「語法説明」では, "*Given name or given names* is the most suitable expression for people, such as Chinese, who usually say their surnames first." となっており, やや態度が進展している。我々日本人も, もうこれまでのように "My first name is Yasuhiro." などと言うことは止めにしたらどうか。

> My name is Ken Minami.
> I am a junior high school student.
> I like baseball.
> But I am not a good player.
> I have a sister.
> Her name is Midori.

She is a good tennis player.
(New Horizon English Couse I　東京書籍　1985年　31ページ)

本章では，あくまで「英語使用」の場に日本人の「文化的スタイル」を持ち出すことを論じているのであり，「英語教育」段階で既にそれを打ち出せというのではない。従って，ここに中学校英語教科書を取りあげたのは，単なる例示のためであって，その編集方針を批判することがねらいではない。この自己紹介は少なくとも二箇所で，日本人の文化的スタイルを捨てている。一箇所はいうまでもなく，'Ken Minami' であり，もう一箇所は "I have a sister." である。姉，妹にそれぞれ対応する単語をもたず，ふつうこの区別をつけないという異文化に合わせた紹介のしかたになっている。それに何の抵抗も覚えないのならばそれでよいが，違和感を覚える日本人も少なくないはずだ。私自身は，"I have a sister." ではどうしても気持ちが落ち着かないので，必ず "I have an elder sister." と言うか，"I have a sister—elder one." ないしは，"I have a sister. She is 10 years older than me." まで言うことにしている，自己の精神安定のためにそう言ったからと言って，別に疎通上の不都合が生じるとは思えない。姉妹兄弟に限らず，先輩後輩，上司部下，親分子分など，日本のタテ社会構造に由来する一連の日本語は，日本文化を紹介するためには，何とか英訳して伝えねばならないことは言うまでもなく，また日本文化紹介が目的ではなくとも，さきほどの「姉→elder sister」のように，その日本語概念をそのまま直訳して用いなければ日本人として気持ちが休まらないというのなら，たとえそのために多少おかしな英語になろうとも遠慮する必要はないと思う。

上の引用の中からもう一点取りあげたいのは，"I am not a good player." "She is a good tennis player." だ。元来日本人は自己及び自己のサークル（ウチ）に属する者の力量や美貌を誇示することを嫌う傾向をもつ。"I am not a good player." はこの傾向に沿い，"She (*i.e.* my sister) is a good tennis player." は逸れる。一般に，日本人がその自己卑下性向を英米語的な自己顕示性へと切り換えるのは至難だろう。口では "This is really a good cake. I hope you like it." と言いながら手製の菓子をすすめても，その言葉にはまるで感情がこもら

ないものだし，自分の妻子のことを“My wife is a super cook. She is great at salad.”だの，“My son is brilliant. He sure is a scholar.”だのと普通の日本人に言えるものではない。しかしながら，日本人の謙譲精神は，そのまま打ち出すと誤解やショックを与えることも少なくない。私たちは用意した饗応品の粗末さを暗示するため，(“Please eat a lot.” とは言わず)「おひとつどうぞ。」と言うが，“Please have one (peanut, etc.)”では相手はあっけにとられるだろう。また，粗末さを強調する余り，饗応物の存在を全面的に否定してしまうこともあるが，“We have nothing to serve you, but please help yourself.”(「何もありませんが，どうぞ。」)は論理矛盾と取られる。或る程度まで相手の文化に歩み寄る必要があるが，その段階を越えることは日本人としての心性が許さないというところでは，日本文化に対する相手の理解を求めながらでも自己の姿勢を通してよいと思う。“Let us serve you a cup of *socha* or ‘coarse tea’ as we humbly call it in our culture.” “This is what we call in self-depreciation a ‘trifling present’ from me. I hope you'll accept it.”などはそれを簡潔に行うための一法である。

中学校英語教科書(“Which do you like better, A or B?”)でそれに導入され，大学のシェイクスピア講読(“To be or not to be, that is the question.”)で確認するまで，私たちは主として英語教育を通して西欧的な二分法論理を学んできた。しかしそれは多分に知的理解にとどまっていないだろうか。“Yes or no?” “All or nothing.” とばかりに異質なものを捨象してしまう一神教的な二者択一の論理を私たちはもたない。私たちのものは多神教的な「とり合わせ」の論理であり，そこでは一見相矛盾するものが併存し，調和し得るのである。日本人の山本さんが初めて一週間イギリス旅行をするとする。一週間の旅行期間中彼は，“Smoking or non-smoking?”(飛行機)，“English or continental?”(朝食)，“Black or white?”(コーヒー)，“Bath or shower?”(ホテル)，等々選択疑問の洪水の中で暮らさねばならないだろう。いずれも山本さんには答えにくい種類の疑問文だが，“Either is okay.”とか“I'd like both.”と答えれば相手は当惑するだろう。このような場で積極的に「あれもこれも」式スタイルを持ち

出すことは控えねばならない。山本さんにできることは，こう言ってしまった後で，当惑した相手になぜ自分が咄嗟に“I'd like both.”と答えたのかを釈明することであり，そこに彼の文化スタイルが出せるにすぎない。もっともこれをもう少し積極的に打ち出してよい状況も考えられる。例えば，日本に一定期間以上在住している外国人夫妻に招かれ，同様の質問を受けたような場合である。“I really don't mind. Actually, it's very hard for me to choose one, because I come from a culture that is pluralisticlly-oriented and tends to be all-inclusive.” などとこちらの立場を述べることは構うまい。しかる後に，敢えて選択を行うか，それとも相手に一任するかは重要なことではない。

「假りにもし日本人が英語を巧く喋れるようになるとしたら，日本人が日本人らしくなくなるか，英語が英語らしくなくなるか，どちらかの条件が必要であろう。」と言ったのは林語堂である。(8) 本章に紹介した日本人の「文化的スタイル」の事例は，考えればまだまだ取り出せるはずのもののほんの断片にすぎないが，いずれも「日本人らしさ」の根幹に係わり，それを失えば当然その分だけ日本人らしさも失われるはずのものである。これまで，「英語らしさ」を全科玉条として，そのために日本人としてのエトス，価値観，イデオロギーを容赦なく犠牲にしてきたのが我が国の教語教育ではなかったか。その結果は，運用能力という面からは否定的に評価されることが多いが，前章で明らかにした如く，自国文化という基点を失っては英語による意思伝達は成り立たない以上，それは当然である。日本の国際化は抗し難い時代の潮流である。そのような時代状況の中で，日本人の観点から世界を見据え，日本人でなければ言えないことを言うという形での国際社会への貢献が求められているのだ。日本人英語使用者の主体性確立を急がねばならない。本稿はそのための一試案を提出したものだ。主体性即ち「日本人らしさ」の維持と「英語らしさ」の維持とは，林語堂が考えるように相互排除的であろうか。それは要するに基準をどこに取るかの問題である。「英語はアメリカ人やイギリス人のものだと考えずに，いくつかのルールを守りながら，自分で自由自在に創り出していくことば」(9) だとみることが国際英語概念の下では可能である。英語らしさを犠牲にするのだ

と考える必要はない。

以上，日本人の「文化的スタイル」を実際の英語使用の場に持ち出すことの意義を述べてきたが，話を一応英語使用に限定し，英語教育への適用について言及を避けたのは，英語使用への打ち出しは何ら既存の制度に触れることなく，使用者個人の決断さえあればすぐにでも実行に移せるからである。だが，制度—文部省学習指導要領，英語教科書，現場の教育の意識など—を動かすことができるなら，英語教育への適用も可能であり，現に部分的にではあるが，このような方針を打ち出している教科書もある。(10)

日本語は日本文化の基層として位置づけられる。その見方からすれば，我々の英語表現の中の日本的特質を「(日本) 文化的スタイル」と「言語（＝日本語）的スタイル」とに分けて考えることは意味を為さない。両者の間に截然たる境界を設けることは困難である。本章に挙げた数例も日本語の影響によると見て見られないことはない。両スタイルの違いは結局，文化的特質が顕在しているか（＝文化的スタイル），潜在しているか（＝言語的スタイル）にあるとも言えよう。ここに敢えて前者を後者（例えば，“How do you think?”）から切り離して特筆したわけは，文化紹介という形態の情報発信を重視することが一つ，稀に英語駆使力を獲得した日本人に出会えば，まず決まってショッキングなまでに「あちら風」に人間改造されているという現状への挑戦が二つ目である。

＜註＞

（1） Trifonovitch, G. “English as an International Language.” Smith, L. E. ed. *English for Cross-Cultural Communication*, Macmillan, 1985, pp. 211–12.

（2） Shaw, W. D. “Asian Student Attitudes towards English.” Smith, L. E. ed. *do*.

（3） Cf. Lyczak, R. *et al*. “Language Attitudes among University Students in Hong Kong.” Lord, R. ed. *Hong Kong Language Papers*, Hong Kong Univ. Press, 1979.

Pride, J. “The Appeal of the New Englishes.” Pride, J. ed. *New Englishes*, Newbury House, 1982, pp. 3–4.

Wong, I. “Native-Speaker English for the Third World Today?” Pride, J. ed. *do*. p. 262.

(4) J.V. ネウストプニー『外国人とのコミュニケーション』(岩波新書 1982年) 41ページ。

(5) 同上 43ページ。

(6) Via, R. A. "Via-Drama: an Answer to the EIIL Problem." Smith, L. E. ed. *op. cit.* p. 205.

(7) 例えば, 中村敬, 若林俊輔他『The New Crown English Series 2』(三省堂 1987年) 41ページ。
NHK テレビ夜7時ニュース (1987年8月8日)。
朝日新聞 (1987年10月10日) 参照。

(8) 林語堂『支那のユーモア』(岩波新書 1982年) 150ページ。

(9) ダグラス・ラミス『影の学問, 窓の学問』(晶文社 1982年) 94ページ。

(10) 例えば『The New Crown English Series 2』(三省堂 1987年) 41ページの "Let's Talk" という欄に次のような対話が置かれている。

A: My name is Sato Goro.
B: Pardon?
A: My name is Sato Goro. Sato is my family name.
B: I see. You say your family name first in Japan.
A: That's right.

同じ『The New Crown English Series (1, 2 & 3)』の1984年度版では, 日本人登場人物が自分の姉妹兄弟に言及するとき, 必ず sister, brother に older, big, younger, little のいずれかを冠している。